

北ガーナ・カッセーナ族の宗教：その医療体系としての側面をめぐって

阿部, 年晴
九州芸術工科大学

<https://doi.org/10.15017/2230973>

出版情報：九州人類学会報. 1, pp.10-13, 1973-10-31. Kyushu Anthropological Association
バージョン：
権利関係：

北ガーナ・カッセーナ族の宗教

—その医療体系としての側面をめぐって—

九州芸術工科大学 阿 部 年 晴

序

I 宗教体系について

- (1) 霊的存在とその司祭
- (2) 個体観

II 医療について

- (1) 疾病観
- (2) 診断と治療

結 語

カッセーナ族は、ガーナ北部からオート・ヴォルタ南部にかけて住む黒人農耕民であり、文化的にはヴォルタ諸族に属する。主食は穀物（キビの類）で、家畜（牛、羊、にわとりなど）も飼育している。社会組織の基本的なわく組みは、父系血縁集団である。

他の多くの所謂未開社会におけると同様、カッセーナ族のもとにおいても、医療は宗教体系ときわめて密接に関連している。以下の報告では、その関連の概略について述べてみたい。なお、資料は、報告者が1969年3月～11月に北ガーナで行なった現地調査の際に得られたものである。

I 宗教体系について

(1) 霊的存在とその司祭

人間や自然をめぐる諸現象は、さまざまな不可視の霊的存在の働きによって説明されるが、それらのうち主なものとして、ウエ（天神）、テガ（大地）、ウダガ（ブッシュの悪霊？、占師の守護霊）、リラ、祖霊などがある。

ウエ（天神）には、通常、供物や祈りはささげられず、特定の司祭もない。

テガ（大地）の霊は、各地域集団毎に、その土地に最初に住みついた血縁集団の最年長の男子が祀る。

ウダガは、ブッシュの中の樹や猛獣、蛇、カメレオンなどに宿っている。そうした樹をきり倒したり、蛇やカメレオンが交尾しているのをみた人はウダガに憑かれる。憑かれた人は、通常、占師となり、ウダガはその守護霊となる。

リラは、さまざまな形で組み合わされた木の根や葉、動物の尾などに宿る霊であり、きまった名前と所有者がまもるべきタブーをもっている。葉はたいていリラの種類と考えられている。

祖霊は、共同体の重要な構成員であり、それぞれの父系血縁集団の長老が祀る。社会組織の核が父系血縁集団であることから予想されるように、カッセーナの社会において祖霊はきわめて重要な位置をしめており、伝統と秩序の守護者であり、共同体の生命の守護者である。

(2) 個 体 観

人間は眼に見える身体と不可視の霊的要素からなると信じられている。霊的要素の主なものは、ウエ（守護霊もしくは運命）とジョロ（魂）である。

ウエは天神（ウエ）と同音であるが別な存在なので混同してはならない。ウエは誕生に際して天神が各人に与える生命力であり、天神の一片であるといえよう。それは、ある場合にはその個人の守護霊とみなされ、他の場合には運命とみなされる。いずれにしても、個のうちにあってすぐれて個性的なもの、特異な天分、反社会的な性向などはウエのせいとされる。それは個人のうちなる自然であるということもできよう。

これに対して、ジョロは、思考や知覚を可能にするものであり、個人のうちに再生した祖先である。各人の社会性もしくは社会的側面は、ジョロの働きである。夢は睡眠中に身体をはなれたジョロが経験することであり、ウィッチにとらえられたり喰われたりするのもジョロである。

II 医療について

(1) 疾 病 観

病気は二種類に大別される。その一つは、比較的容易に診断でき特定の病名をあてはめることができるもので、Jawiru と総称され、単純な薬物療法や外科療法の対象になる。この種の病気にかかった人は、その病気に効く薬をもっている人（リラの所有者）から、にわとりなどの礼とひきかえに薬をもらう。

これに対して、病名がはっきりしなかったり、薬物を用いても効き目がないようなときには、人々は占師を訪ねて診察してもらう（つまり、占ってもらう）。こうした状態を指すものとしては、たとえば、ko choge, という表現がある。これは、狭義には身心の異常もしくは不調（病的状態）をさすが、広義には、生活がうまくいっていない状態一般をさす。それは、錯乱状態におちいること、次第に衰弱すること、家族に病人が続出すること、家畜が理由不明で死ぬこと、狩りで失敗ばかりすること、などを含んでいる。要するに、ある個人をとりまく状況が調和と生命力をそなえた順調なものでないことを表現しているのである。

choge という語は、一般的には、調和や秩序を破る行為とそれらが破れた状態の双方を意味するようである。たとえば、タブーを犯すことや長老の言葉に従わないことも choge という。また、ウダガが宿っている木をきり倒してウダガにつかれたような場合にも、mo choge ko （私はそれ

をそこなった), ko be mo (それは私につきまとっている)という風に表現する。

いずれにしても, ko choge と表現されるような状態はいずれかの霊的存在が惹き起すものであり, 占師に解説してもらわなければならない。

(2) 診断と治療

占師は, このような状態について占って, 通常, ウダガ, 祖霊, ウエ(守護霊)のいずれかのせいであることを指摘する。これらは, 患者の行為に腹を立てて病気によって罰している場合もあれば, 祀られたいとの意志表示をしている場合もある。

祖霊が原因である場合 — 占師は, 祖先の名前と何を供えるべきかを告げる。その結果, その祖先の子孫たち(患者も含めて)が集まり, 長老が供物と祈りを捧げ, 病いを癒してくれるよう祈願する(つまり, 祖霊祭祀が行われる)。

この点について, 報告者は次のような仮説をもっている。すなわち, 病気の原因として祖霊の名前を告げたとき占師が探りあてたのは, 親族集団内部における何らかの軋轢が患者の病状の原因となっているということではないだろうか。その軋轢は, 患者をめぐる人間関係にあるのかも知れないし, 彼が伝統的な規範にそむくような行為をしたことに由来するのかも知れない。いずれにしても, 治療は, 患者を隔離することによってではなく, 彼をめぐる親族集団内部の調和を, 祖霊祭祀を通じて回復することによって行われる。

この仮説の前提になっているのは次のような事実である。カッセーナ人たちは, 生活の大半を親族集団の内部で送っており, そこにおける人間関係は日々の生活においてきわめて重要な意味をもっている。祖霊はそうした人間関係を支える原理であり規制する力である。それ故, カッセーナの社会においては, 祖霊祭祀は, 人間関係におけるもっとも基本的な価値を浮き彫りにし, 確認し, 生きる機会を与えるのである。

ウエ(守護霊)が原因である場合 — すでに述べたように, ウエは天神に由来するものであり, 社会的なもので律しきれない深層の自我, 個性, 運命などとして考えられている。ウエによって起された病気が何らかの葛藤もしくは軋轢によって生じたものであるとすれば, その葛藤は, 祖先が関与する場合とは異なり, 自我の深層で起っているものであろう。この点はなお不明であり, 今後の研究課題として残されている。ウエが原因である場合には, 占師が患者の屋敷をおとずれて彼のウエのための祭壇をつくり, 儀礼をとり行なう。この場合は占師が司祭の役をつとめ, 長老は患者とともに儀礼に参加するだけである。

ウダガが原因である場合 — 症状としては次のようなものがある。若者が錯乱状態におちいって, 幾日も裸でブッシュをさまよう。原因不明のまま次第に衰弱したり, 視力が衰えたり, 足がうんだりする。こういう症状がみられるとき, 占師を訪ねると, しばしばウダガが憑いていて, 患者が占師となってウダガを守護霊として祀ることを望んでいる, と告げる。占師になるための訓練を受けた後, そのウダガを守護霊として祀って, 占師としての仕事を始めると, 病いは癒える。祀ることを拒否す

ると死ぬことが多いので恐れられている。ウダガに憑かれるということの精神身体的意義は報告者には不明である。

ウィッチが原因である場合 — 以上の外に、ウィッチに魂(ジョロ)をとらえられたために起る病気もある。ウィッチは主として女性であり、ウィッチとしての性質は母方から伝わる。ウィッチは通常、自分と同じ屋敷内の人しか害することができない、といわれている。ウィッチに関する信念の背後には、婚入した女をめぐる屋敷内の葛藤があると思われる。ウィッチによる病気の治療にあたるのは、サンポーレと呼ばれるウィッチ・ドクターである。ウィッチ・ドクターはすべて男性であり、ウィッチと闘って患者の魂(ジョロ)を解放することによって治療する。

なお、占師もサンポーレも、上記のような儀礼による治療と同時に薬物療法も併用しており、薬草に関するエキスパートでもある。

結 語

以上の素描によっても、カッセーナ族の医療が、人間的経験の世界を説明する原理としての宗教体系と密接に関連していることは明らかであろう。また、彼らの疾病観や治療についても若干の側面を示し得たと考える。彼らは、ある種の症状は局部的生理的なものとみなし、そのようなものとして治療しているが、別の種類の症状は患者をとりまく種々の葛藤のあらわれとして解説し、そのようなものとして対処している。そこにみられるのは、個々人がおかれている具体的な状況(社会的脈絡)に対する注意深く鋭い観察眼である。